

ほっかいどう N I E 通信

Newspaper in Education



発行 北海道NIE推進協議会

〒065-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内

TEL 011-210-5802 FAX 011-210-5826

実践校の応募が好調

新年度 すでに10校内定

2004年度の道内のNIE実践校への応募状況が好調だ。北海道NIE推進協議会(会長・小林甫北大教授)は3月末まで応募を受け付けるが、すでに約10校が内定し、さらに10数校から打診が来ている。同協議会は本年度より若干多い小中高校合わせ30数校を選んで日本新聞教育文化財団NIE委員会に正式推薦する予定だが、希望校が多ければさらに増やすことも検討している。

NIE実践校の制度は全国の新聞各社と同財団が連携して1996年度から進められ、道内では03年度までの実践指定校

が約110校に達した。実践指定期間は原則2年間で、活動する先生の数に対応して1年間のうち2カ月・5・6カ月間、一般

日刊紙6紙(一部地域は7紙)を無償提供。「生きた教材」として総合的な学習の時間などで活用してもらう。

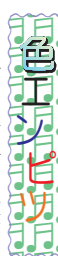
複数の新聞を同時提供するの、各紙を読み比べて内容の差異を比較分析し、自分なりの「考える力」を養ってもらおう、というNIE本来の狙いがある。

03年度の道内の実践指定校は計32校。このうち30校は同財団NIE委員会が認定した「正規ワク」、残る2校は同協議会が「独自ワク」として購読料を負担することにしたものだ。02年度で実践を終えた一部の学校から「3年目も継続したい」との希望があり、この中から2校を選んだ。

一方、04年度の新規募集ワクは20校前後。これは03年度に指定となった10数校が実践を継続する結果、認定ワクが限られたためだ。さらに、03年度終了校の中で、「3年目継続」希望校が数校あり、これらの調整も課題となる。

雪物語

雪は子供に最高の遊び場をつくり、ロマンチックな夢を描く。札幌・緑丘小では雪を「生きた教材」として教育課程に位置づけ、戸外遊びや総合的学習に生かしている。聞き、3年佐藤友紀子先生の音楽を参観した。新教材のせいで新鮮さを感じた。休みの時間、子供たちは自由に雪合戦・ダルマ造りに興じ、その体験を学習に存分に生かしていた。まぶしく輝く雪、不思議な世界を作る結晶。雪の七変化は子供たちをメルヘンの世界へ誘う。頭の中



新しい学習指導要領の完全施行後、各学校では「学力問題」論議がことさらに沸騰している感がある。知識量を競い合う学びか、人格形成に向けた学びか、人生を通して学び続ける価値観を形成するか、

ルが開催されたが、その応募作品の中に虐待を含む「子ども受難」を取り上げたものが数点あった。本日の学力は、学びを通して人と人との心温まる関わり合いを形成して

他の人から学び、主張を発信する営みが、学ぶ主体自らの生き方の未来や希望に発展することは自明ではあるまいか。こうした新しい形の学ぶ営みを「低学力」と呼ぶのはふさわしくない、と私は思

いる。それは、すべてに先がけて新聞教育がある、と考えたうえのことではない。私たちの実践は、各教科や領域などの目標達成に向け、どのように新聞教育が有用であるかを検証しつつ深めている

各教育研究団体がそれぞれの立場で実践を深めているのと同様、私たちは新聞の持つ価値観に目覚めた集団である。それにしても新聞は題材いっぱいでも有用な教材である。「生きる力」の根幹をなす要素に、情報活用能力があることは自明である。「新聞づくりは仲間づくり」という。私たちにとっても、子どもたちにとっても、さらには地域・PTAにも有用な新聞教育を目指す活動をいっそう充実させたい。

新聞教育は、温かい人間社会復活の営み、と表現したらい過ぎだろう。か。新聞教育は、温かい人間社会復活の営み、と表現したらい過ぎだろう。か。新聞教育は、温かい人間社会復活の営み、と表現したらい過ぎだろう。か。



十勝新聞教育研究会会長

若山 茂樹

学びと感性育てる新聞教育

境、その中でも生存権や生命そのものが成人の手によって脅かされる状況もある。過日、十勝新聞教育研究会主催の小・中学生スクラップコンク

くれる。確かな知力や豊かな感性は、いじめや非行を克服する原動力である。言い換えれば、歴史の深い学問を学び、社会の現象を自分の力で認識し、

う。新聞教育はその中で従来より一層、重きをなしている。新聞教育に携わる仲間たちは、瞳の輝きが深まった児童・生徒に、確かな手ごたえを感じて

ものであり、授業との適切な関わりが子どもたちの学び意欲を伸ばしている。人間意志や智慧で裏付けられた新聞記事が、感性を豊かにしてくるのである。

新聞教育は、温かい人間社会復活の営み、と表現したらい過ぎだろう。か。新聞教育は、温かい人間社会復活の営み、と表現したらい過ぎだろう。か。

新聞教育は、温かい人間社会復活の営み、と表現したらい過ぎだろう。か。新聞教育は、温かい人間社会復活の営み、と表現したらい過ぎだろう。か。

「コラム書写」で成果

アンケート調査によれば、本校の生徒は、「新聞を毎日読んでいる者」39%、「ほとんど読まない者」22%で、



北海高校講師

「スポーツニュース」「ラジオ・テレビ欄」に傾斜していることを考えると、新聞は「見て」というにはほど遠い内容が90%になる。

えて、「言語の教育」「情報の教育」のふたつの視点から、ごく素朴な形で実践を行うことにした。「言語の教育」朝刊1面のコラムは、

新聞の巻頭言のようなものだと思う。その日その日の世の中の動きを、簡明に映し出すコラムは良質な国語教材である。本校では以前から、コラムの書写と要約の作業を生徒に課してきた。「書写」は「音読・暗唱」

考え、キーワードをピックアップし、さらには感想を述べるなどの課題を付した「コラム演習」も適宜行っているが、こちらは小論文対策を意識しての実践という側面もある。

「情報教育」新聞記事と比較分析しながら読み、批判的な読み方を身につけていくためのガイド役として、『新聞の新聞』を週1回程度発行している。同一事件について各新聞の記事の比較、同一新聞での記事の追跡、コラムや解説を基に関連記事を読み直す、あ

渡邊

武

日常に自然と新聞が・・・

わが校では「新聞を社会と教室を結ぶ掛け橋にする」を目標に2年間のNIEの実践を行ってきました。当初は、

マ漫画の作成、歴史新聞の作成、模擬選挙など思いつくままに行っていました。特に昨年実施

NIE実践奮闘記

あることを自覚する手助けとなったと思います。「新聞は生きた教材」と言われますが、それなら教師は料理人とも言えます。新鮮なネタを見つけ

いうわけではありません。2年間の試みはそれなりに効果はあったと思いますが、しかし、最近、このような試みでは不十分だと感じています。

ニュースすべての中々せることは確率的には低いとはいえず、やはり生徒が普段からニュースに疎遠になっている結果でした。年明けから、新聞を題材にした社会科通信を生徒に発行することにしました。NIEの実践をするために特別な何かをしようにと肩ひじを張るのではなく、ごくあたりまえのことは行うことが大切なのです。生徒の日常の中に自然と新聞がある。それができた時こそ、本当の意味でNIEの実践が成功したと言えるのではないのでしょうか。

見聞の切り抜きをさせた。新聞記事を使っての様々な授業展開、意図的な投稿、ひと



東海大第4高校 付属中等部教諭

工藤

優樹

した模擬選挙は、北海道知事の選挙戦を新聞で追うこと選挙の勉強になるだけでなく、自分たちが社会の一員で

料理し、いかに客(生徒)に出すか、そのために教師は日ごろから切磋琢磨しなければならず、ただ新聞を使えばNIEだと

で、的中させることは2の次でしたが、一人くらはいは当たるだろうと期待していました。しかし結果は的中者ゼロ。10大

ニースすべての中々せることは確率的には低いとはいえず、やはり生徒が普段からニュースに疎遠になっている結果でした。年明けから、新聞を題材にした社会科通信を生徒に発行することにしました。NIEの実践をするために特別な何かをしようにと肩ひじを張るのではなく、ごくあたりまえのことは行うことが大切なのです。生徒の日常の中に自然と新聞がある。それができた時こそ、本当の意味でNIEの実践が成功したと言えるのではないのでしょうか。



釧路大生が新聞を勉強

少年犯罪を取材、記事執筆

道教育大釧路校の学生たちが1月19日、北海道新聞釧路支社を訪れ、NIE活動を行った。教師を志す学生たちに将来新聞を教材として活用してもらおうという試みだ。玉井康之・助教授の教育学ゼミの学生10人余りが参加、まず釧路署の浅野悦男生活安全課長の「少年犯罪と学校の対応」というテーマの講話を聞いた。写真Ⅱ。過去に取り扱った少年たちが立派に更正している例が紹介され、「子どもは化ける。大学で教師として

の哲学をしつかり学び、よく話を聞いてやってほしい」というアドバイスに耳を傾けた。学生たちは同課長の話について取材を兼ね活発に質問を浴びせ、これをもとに記事を執筆した。記事のテーマになったのは「少年を取り巻く現状」「少年犯罪を防ぐために」などいろいろ。同じ話を取材しても、問題意識の持ち方によって記事の内容が異なってくることを実感した。

同支社のスタッフはそのうえで「多様なものの見方、考え方を探る手段」として新聞活用は最適な方法」と強調した。

△原稿を募集します▽

学校現場からの投稿を歓迎します。NIE関連のほか学校経営や児童生徒の指導、父母地域の話題などについて400字前後にまとめてください。学校名を含め原則実名としませんが、希望により匿名も可。ただし原稿にはお名前と年齢、住所、電話番号を明記してください。採用分には2千円の図書カードを贈ります。宛先は〒065-0871 札幌市中央区大通西3-6 北海道新聞社内、北海道NIE推進協議会事務局(電話011-210-5802、FAX011-210-5826) フロッピー処理して送ってください。



石狩南高校

新聞で知識と実社会をつなぐ

NIE実践2年目の石狩南高(小須田洋校長・生徒数1100人)は生徒の9割以上が進学する受験校。週5日制の導入で授業時間が削減され、「総合学習」や「情報」の教科が新たに増えている中、「新聞を読める面積を増やそう!」と奮闘する教師たちの活動ぶりをルポした。

(北海道新聞NIEスタッフ・江本 麻貴)

「コメント力」鍛える

同校では国語、政経、理科などを中心に幅広く新聞を活用した授業が行われ、定期的に生徒向けの「NIE通信」を発行している。授業で学習した知識が日常生活のどういうことに役立つのか、自分の身近な暮らしにどう関連しているか。それを実感として知るため新聞を「脇役」として活用しながら、覚えた知識と実社会をつなぐ工夫をしている。

2年4組担任の田中崇志教諭(国語科)は「NIE4原則」を掲げる。



興味をひいた記事を読む生徒たち

①「型」通りに②興味を持った記事で③添削はせず(生徒同士読み合わせる)④繰り返し書くの4点だ。

生徒たちは興味や関心を持った記事の要約を200字程度、自らの意見を200字程度「型」通りに書くことを繰り返し、要約力とコメント力を鍛え、「思考の型」を作るためだ。田中教諭は「添削はしない。書き直しはいらない。他の生徒の作品も読み、数多くの記事に触れ、数多く書くことを「させたい」と話す。こうして結実した生徒たちの作品は、北海道新聞の小・中・高校生投稿欄「みらいの広場」で過去2年間だけで30回も掲載された。

「新聞授業」に対する生徒たちの感想を紹介したい。「同級生の文章を読んだり、自分と視点が変わったりして面白いです」

「文章を書くことに抵抗がなくなった。ほかの授業の基盤にもなっているような気がする」

「新聞を読む授業を通して、今起きていることが分かり、いろいろなこ

教育現場のサポーターに

苦小牧民報社のNIE活動

苦小牧には新聞づくりに関心な学校が多い。市教育研究会新聞教育部会が指導・けん引役で、苦小牧民報社も毎年、小学校、中学校対象の学級新聞コンクールを主催し、活動のお手伝いをしていく。ここでの入賞作品は全国レベルのコンクールでも好成績を収め、高い評価を受けている。苦小牧地区コンクールは回を数え、昨年は29点の作品が寄せられた。隣の白老町からの応募もあった。

「新聞づくりは学級づくり」ともいわれ、編集作業を通じて学級全体を見つめる目や、問題意識を持つ心を育てることに役立つ。それらは応募作品からも読み取ることができ、ビッグイベントの学校祭や運動会など行事ものの紹介のほか、最近では教室を飛び出して、校区の歴史調べ、生徒の意識調査、いじめ問題、さらには高齢化社会や交通事故を取り上げた企画記事

とを考えるようになった。ただぬくぬくと過ごすだけじゃなく、世の中のために何かしなくちゃいけないと思った」。

「One For All For A」

One(ひとり)はみんなのために、みんなはひとりのために。この学級目標は確実に生徒たちの心に刻まれているようだ。



学級新聞コンクール表彰式。調査・企画記事も目立ち意欲的な作品が多い

事も出てきて、審査しながらそれらに目を通す作業は楽しい。入賞作品はデパートに展示して、市民にも紹介しているが、生徒間でも刺激にもなっているのか、学校から新聞づくりに関する講師派遣の依頼が目立って増えてきた。苦小牧民報社も積極的に応えている。取材記者や新聞のレイアウトを担当する整理記者よる出前講座、さらに職場体験や社会見学などで会社を訪ねてくる学校も多い。中には夏休み研究の記

飛び込みも。コンピュータ化された編集作業から製版、印刷そして家庭に届くまでの工程と、生活情報でもある広告の役割まで新聞社の仕事を、社内を案内しながら紹介し、見学の感想などをパソコンの記者用ソフトを使って入力

してもらっている。自分の書いた文章が新聞記事と同じモニター(ゲラ)になって出てくる体験が喜ばれている。そして質問タイム。「記者の一日」と苦勞話に関心は高いが、新聞用紙の一日の使用量や記者の平均年齢、給与まで、即答できなかったり、どきまぎしてしまいう質問もある。子供たちの旺盛な好奇心にいつも感心させられる。

学級新聞づくりのアドバースや職場体験で来社する子供たちと接する機会を、今後も大切にしていきたい。新聞を通して実社会に目を向け、考える力を養って、そこを願っているし、そこに新聞の大きな役割があるとも考えている。教育現場のサポーターであり続けていきたい。「生きた教材」になってくれているとうれしい。

(苦小牧民報社編集総務・横田泰正)

海外視察、今年は中止

毎年3月下旬に実施されている海外NIE事情視察団の派遣は今年、受け入れ先となった日本が中止となった。日本新聞教育文化財団が派遣した道内からもNIE実践者数人が毎年参加していたが、予定していたドイツ南部の都市などとの間で日程のやりくりがつかず、断念したという。同財団は来年3月にはドイツ訪問を実現したい、としている。

世代を超え共感の声

「みらい君」から新たなつながり

北海道新聞の子供の投稿欄「みらい君の広場」の編集を担当していると、月に数件、大人の読者から「筆者の連絡先を教えてください」といった声が届く。この欄を通じて、新たなつながりが生まれているようだ。世代を超え、読者同士が自由に意見を交わせる場を作るのも、これからの新聞の役割かもしれない。

(北海道新聞NIE推進センター委員・阪井 宏)

■おいのファンと文通

上川管内美深町の田村七菜さん(中学1年)の宝物は、「みらい君の広場」に載った自分の投書の切り抜きだ。

昨年3月、「みらい君」に横浜ベイスターズの木塚選手のファンであることを切々とつづった投稿が載った。すると、木塚選手のおぼで、芦別市在住の茶木つやさん(76)から、「心の宝石を見たよう」との手紙が、



阪井 宏委員

私のもとに届いた。埼玉県在住の木塚選手の父親からも、礼状や本人のサインが送られてきた。田村さんと茶木さんとの手紙のやりとりは、今も続いている。「一通の投書がこんなにいろいろな人と知り合うきっかけになるなんて」と田村さん。机の中には、木塚選

4教諭が実践報告

帯広十勝セミナー開く

第2回NIEセミナー(十勝新聞教育研究会、北海道NIE推進協議会主催)が2月7日、北海道新聞帯広支社会議室で開かれ、十勝管内の小中高校18校の教師ら約40人がNIE活動の具体的な方法や成果について熱心に話し合った。写真1。

学校新聞づくりの研究活動が続いている十勝新聞研の「実践交流会」を兼ねた催しで、セミナーは昨年2月に続いて2回目。鹿追小・橋本隆史、川西中・佐々木円、帯広



柏葉高・田口耕平の4教諭が実践報告した。この中で橋本教諭は、4年生の総合的な学習の時間を活用した国際理解教育に関する実践について報告。新聞記事や新聞データベースから「海外コント」や「動物」の話題などを選び、子供たちが世界に思いをめぐらせる瞬間を繰り返して体験できるように努力した。この結果、図書室の本で調べ学習、というマンネリ化が解消され、多くの子供たちが世界に目を向けるようになった。などの成果を披露した。

広尾中の石川教諭は、過去に新聞各紙に取り上げられた「ニホンオオカミか野犬か?」の記事などを生徒に読ませたうえで、各紙の論調の違いを指摘させ、自分なりの視点や考え方で新聞を読み込むことの重要性を強調した。

手のサインが入った「みらい君」の切り抜きが、大切にしまわれている。

■私も漫才で怒られた

今年2月1日付で、旭川市の佐藤匠君(中学3年)は「お笑い芸人になりたい」と書いた。漫才好きの佐藤君は「人を不快にさせない、真の意味のお笑い芸人になりたい」とつづった。翌日、私のもとにファクスが届いた。

「私も戦争中に学校で漫才を演じ、校長先生に『戦時下には人を笑わすとは何事か』としかかれ、廊下に立たされました。便りの主は、同市在住の中山和子さん(77)。「ぜひ会ってみたいのです」と締めくくられていた。

NIE アドバイザー

三上氏ら5人を推薦

日本新聞教育文化財団が04年度に創設する「NIEアドバイザー」制度について、北海道NIE推進協議会は道内から5人を推薦することに決めた。いずれもNIEの実践経験が深い先生方で、今後2年間、NIEの旗振り役として活動してもらう。5人は日下部憲一・札幌市もみじ台南中学校長、三上久代・同市月寒中教諭、上村尚生・同市日新小教諭、小林直樹・旭川市東陽中教諭、毛利慎晴・士別商業高教諭の各氏。それぞれ現在、過去にNIE実践指定校のリーダー的な立場で活動した経験を持ち、指定終了後も意欲的に実践を継続、成果を上げている。さらに関連

60歳以上も年の離れた「同好の士」からのラブレター。「連絡してみたい」と佐藤君に水を向けたが「ちょっと自信がありません」。だが、中山さんの孫娘も漫才が好きで、路上ライブをしていると伝え、少し考えてみます。

■将来は動物看護師に

「こんな形で、あの獣医さんに会えるなんて」と語るのは札幌市東区の垣内芽衣子さん(高校2年)。垣内さんは1月11日付で「獣医さんの勇気すごい」と書いた。動物園の動物を助けるためにイラクを訪れた札幌市内の獣医の頑張り感激した思いを、400字に込めた。ところが、これを読んだ

NIE全国大会

7月に新潟市で

今年で9回目となる「NIE全国大会」(日本新聞教育文化財団主催)は7月29、30日の2日間、新潟市内の朱鷺メッセで開催される。大会スローガンは「活字文化を大切に発展させようNIE」。新潟県NIE推進協議会

編集後記

学級新聞や壁新聞づくりはNIE活動といえるのか、という質問を先生方からよく受けます。そんな時、こう答えています。新聞を教材活用するのは「読み、考えるNIE」、壁新聞制作は「書くNIE」とい。あふれる情報を使うのみにせず、自ら選択し、考え、発信できる子どもを育てていく、という点で精神はひとつといえるでしょう。全道的に学校での新聞づくりが盛んです。02年暮れに北海道新聞が行っ

と新潟日報社が主管する大会は29日午後1時から式典があり、作家の工藤美代子氏が「考える力新聞が育む」小説『山本五十六』を執筆して」と題し記念講演する。次いで同県内の小学校教師ら5人が実践発表と提言を行い、さらに「子供が高まるNIE」地域や学校の連携を視野に」というテーマでパネルディスカッションがある。30日は午前8時50分から校種別に6つの公開授業、次いで6分科会。午後からは実践教師研修会が開かれ、当日の複数の新聞を使ってNIEの教材づくりに取り組む。大会、研修会への参加申し込みは5月から、同財団と北海道NIE推進協議会で受け付ける予定。同協議会は道内から参加する先生方に交通費の一部などを補助する計画だ。

た「NIEの取り組みに関する調査」では、回答者の73%が「新聞づくりの経験がある」と答えてくれました。先生方たちの自主的な研究組織も各地にあります。北海道新聞教育研究会(本部・札幌)、十勝新聞教育研究会、苫小牧市教育研究会新聞教育部会などがその主なものです。ただ、十勝新聞研のメンバーから「若い先生の間で関心が薄くなり、会員数も減少気味」との悩みも聞きました。NIE活動の柱のひとつとして、これらの研究組織と「共創」をもっと強めたいと思っています。(S)